リカに命をわけてください

白血病で逝った14歳の少女の記録

宇津木　澄　編著

目殺

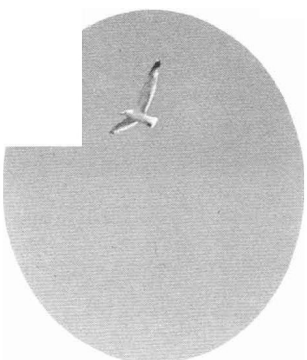
何てバカらしいこと
死はいずれやってくるのに
この人生を生きぬいてみる勇気はないの
死にたくなくて　それでもしかたなく
　死んでいく人がいるのに

血液の必要な私に血を残して下さい
健康な身体を下さい
自殺――
何てバカらしいこと
生きる――
何てすばらしいこと

白血病で逝った14歳の少女の記

リカに命をわけてください

宇津木　澄　編著



リカに命をわけてください

昭和五十四年二月五日　第一刷発行

編著者＝宇津木　澄
発行者＝野間　省一
発行所＝株式会社　講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一／郵便番号一一二
電話東京（〇三）九四五―一一一一（大代表）／振替東京八―三九三〇
印刷所＝慶昌堂印刷株式会社
製本所＝株式会社堅省堂
定価　六二〇円

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします
© Kiyosi Utugi 1979 Printed in Japan

0095―261667―2253（0）（事）

リカに命をわけてください

目次

1 南国に雪の降る朝 昭和五十三年一月十日 逝去 …… 7
2 「ねえ、私白血病？」 昭和五十二年十月一日 入院 …… 17
3 スポーツ好きな〝リカポン〟 昭和三十八年一月二十七日 誕生 …… 29
〈作文〉かがみ村へいったこと／わたしの家族／わたしの決心／小さな親切から始めよう／大きくなったら
4 友へ贈ったノートには 昭和五十年四月 潮江中学校入学 …… 49
〈詩〉おくりもの／無題（私の悲しみはもう）（あの人が遠い人なので）／おしえてあげる／私のつぶやき／おばかさん／無題（ひざの上に広げた）／さよならのページ／無題（朝はコソコソと）（この悲しみを）／私の朝のうれしいひととき／お誕生日おめでとうございます／金色の朝／恋の時間／無題（あなたの名まえを）（ひかっているなと）（あの人があのコと）（話しかけようか）／ブランコ／MYポエム／無題（ねえあなた）（青春って何）
5 恋と友情と不安と 昭和五十一年秋 バレー部主将となる …… 77
〈詩〉無題（私はとっても大きなウソを）（今日足を切った）（私は幸せ、不幸者）（とっても悲しい）（さようなら……）（私はあきらめない）（明日兄きがいっちゃう）（ねえ あなた私の悲しみは）／私

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

6 出さなかった手紙 昭和五十二年七月 水泳大会で新記録を出す——101

〈詩〉無題（今は誰も愛したくない）（ねえ私たちの心）（勉強で上位をたもつ）（夢みることは）（どうして？）（キライ キライ）（顔もみたくない）（あの人以外の）（パット……）（悲しいなあ）（どうしてですか）（あ～あ ねむい）（写真やぶりました）（あのコなんてかわいいのかしら）（あのコが好き……）（どうして キューピッドは）（チャンスはつかむものではなく）（私…今愛する人なんて）（今日 ね ちょっぴり気どって）（やっぱりあのコは）（相手に通じない恋）（私の心がすなおに）（ミルクセイキ）（今日 ミルクセイキの家に）（だれが 自分の気持は）

7 さようならBCR 昭和五十二年九月 BCRコンサート——135

〈詩〉無題（今日 入院した）（入院 2日目）（病は気から）（つかれたとか）（今日は泣きたかった）／最後に／死までの時期／ヤカン／命／つよがり／無題（自殺 なんてばからしいこと）

8 悲しみのクリスマス 昭和五十二年十二月二十四日 最後の面会——161

■利華さんが書いていた日記の断片——172

●そして一冊の詩集が残った——180

あとがき——188

カバー写真・奈良原一高

装幀・馬淵　由美

イッツタイム（じゃあね）

朝の光の中で、燃えつきた命
可愛いい唇、もうそれっきり
明日の命さえわからないとオレに笑っていった
あの娘はもう二度と笑わない　もう帰らない
今はいないあの娘のために
歌ってくれよ、涙のかわりに
時計の音がこわいといって
肩をふるわせていた
あの娘はもう二度と帰らない
明日の命さえわからないとオレに笑っていった
あの娘はもう二度と笑わない　もう帰らない
今はいないあの娘のために
歌ってくれよ　涙のかわりに

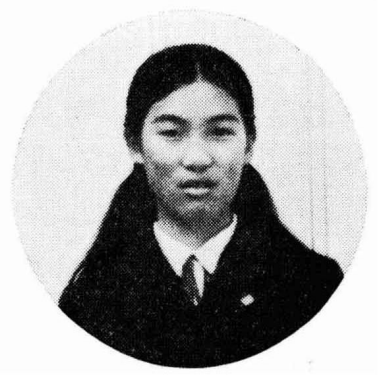
作詞作曲　エキサイティング（高知出身のロックグループ）

1

南国に雪の降る朝

私が死んでも
泣いてくれるかなあ

昭和五十三年一月十日　逝去



潮江中学入学時の利華さん

寒い冬の朝だった。

その日は朝から、南国の高知にはめずらしい粉雪がしらじらと舞っていた。それは白い花びらのように、厚く空を蔽った灰色の雲から間断なく舞い降りてきた。清浄な一人の少女の霊を迎えるかのように……。

昭和五十三年一月十日、午前八時五十八分。

岡林利華さんは、やがて白い化粧を刷きはじめた高知の街を見ることもなく、市民病院の一室で静かに短い生涯に別れを告げたのである。

十五歳の誕生日を目前にした死だった。利華さんはその日がくるのを楽しみにして、だんだん細っていく自分の生命を懸命に支えていたという。

「このお正月が最後になるだろうということは病院の主治医の先生にもいわれておりました。ですから利華の生命はもう一ヵ月ももたないことは私たちも覚悟はしておったんです。それだけに、最後のお正月はぜひ家で過ごさせてやりたかったし、利華もそれを楽しみにしておりました。

ところが、暮れの二十九日に撮ったレントゲンでは胸まで血がたまっていて、しかも血液の減りがとても激しくて、毎日輸血しなければならない状態に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

なってきたんです。この状態ではとても動かすことはできないし、お正月を家で迎えるなんて無理だということは先生にいわれるまでもなくよくわかりました。

でも、そのことを利華になんといって納得させたらいいのか……どう説明したらいいのか……この時がいちばんつらかったですね。それまでは〝不良性貧血だ〟とか〝三ヵ月もすれば治る〟などといってウソをついてきたんですし、白血病ということは一言もいってはいなかったものですから、ほんとうにこまりました。

それでも思いきって、正月には帰られんことを話しましたが、このときだけは、あの物わかりのいい利華も泣いて怒りました。

〝お正月には帰れるっていったじゃない！〟

〝痛い輸血も、髪の抜けるクスリをのんだのも、お正月には帰れるっていったからよ〟

〝帰りたい！　もう一回、潮江の家に帰りたい……〟

そういって泣きました。それをなだめるのに、どういっていいかわからなく

て、一月二十七日の誕生日には帰れるから、それまでにはほんとに帰れるからって……ウソを承知で……それまで生命がもたないことはわかっていて、もう必死になって説得したんです。それをあの子はどう受けとったかわかりません。でも、そのあとで、一時は意識を失なったことがありましたが、不思議なくらいにもちなおしたんです」

利華さんの母・弘子さんは、その時の苦しかったことがよほど胸に泌みているのか、思い出して、涙をポロポロこぼしながら話してくれた。

急性骨髄性白血病――これが利華さんの病気だった。

百科事典の「白血病」の項を見ると次のような解説が出ている。専門的な用語が多いのですこしむずかしいかもしれないが、そのまま引用してみる。

白血病

造血臓器で白血球系に属する細胞が無制限・無秩序に増殖する状態。血液の癌ともいえる。各臓器には、白血病細胞の浸潤、出血がみられる。

【種類と症状】経過によって急性と慢性に、構成細胞によって、骨髄性、

リンパ性、単球性、形質細胞性などに分けられる。……

〔急性白血病〕症状は激烈で高度の貧血、出血、発熱があり、流血中や骨髄に病的な幼若白血球が出現する……。

【原因】ハツカネズミなどの実験動物ではウイルスによる白血病が多く知られている。ヒトでは、不明であるが、ウイルスが有力視されている。

【治療】〔化学療法〕白血病細胞を、薬剤により死滅させる……。

〔支持療法〕貧血に対しては輸血。出血には副腎皮質ホルモン、凝固因子製剤、新鮮血輸血。感染症には抗生物質、白血球輸血など。（以下略）

（『講談社大百科事典』より引用）

以上が「白血病」についての一般的な項目の中から、主な部分を抜き書きしたものだ。

これを読んだだけでは、白血病が不治の病気だといわれていることが実感として受けとられないかもしれない。

しかし、この短い引用の中でも、「血液の癌」であるとか、原因が「不明で

ある」とか、「症状は激烈で高度の貧血、出血、発熱があり」などと、この病気の恐ろしさをうかがわせる語句が並んでいる。

〔治療〕という項目を読んでも、薬や療法を試みることはできても「治る」とは、どの百科事典にも書いてはなかった。

「心臓移植」とか「試験管ベビー」などのように、これまで不可能とされてきた問題を可能にしたほど進歩している現代医学でも、まだ解決の方法がみつかっていないということは、この「白血病」という病気がそれだけむずかしく、恐ろしいものだという証拠なのだ。

そしてさらにこわいと思うのは、年齢に関係なく、また世界各国のどこの国でも、白血病は毎年五パーセントずつふえているといわれていることである。東大病院の小児科で調べたところでは、子供の白血病は昭和二十一年〜二十五年当時からくらべて、昭和三十六年〜四十年では約七倍にふえている。この現象が現在でもつづいているとすると、白血病の問題を他人事としてすませることはできないだろう。

お母さんの話をつづけよう。

小学校時代お母さんと

「利華が一時意識がなくなったのは、一月二日でした。暮れの二十九日ごろから出血がひどくなってきていたことは知っていたんですが、この時は呼吸困難になりまして……レントゲンを撮ってみたら血が胸の中に一杯になっていたそうです。

それでもどうすることもできないんですね。こうやれば絶対よくなるというきめ手というのがないんです。ですから、意識が回復しても胸が苦しい、おなかが苦しいといってエビのように体をよじって訴えるんですけど、私には黙ってみているしか方法がなかった。ほんとうは、見ていられなかったですよ、つらくて

……。

利華は一人で病気と闘っているのに、母親の私はそれを助けてやることもできないんです。せめて手術でもできて利華の苦しみが少しでも楽になればと思ってお医者さんに何回もお願いしました。けれど、手術をすると血がとまらないので処置のしようがないというんです。苦しがってる娘を前にして、処置のしようがないといわれるほど残酷なことはないですよ。〝苦しがっていろ〟といわれてるのと同じなんですから……。

もう薬では追いつかなくなっていたんですね。できることといえば、出血でどんどん減っていく血をおぎなうために輸血することだけだったんです。それと、ふだんから丈夫な子でしたから、その体がいつまでもつかということだったと思います。

結局、一月九日の夜十時に意識不明になって、そのまま……ということになりましたけれど、そのちょっと前に、自分でもこれでもういかんということがわかったんでしょうか……その時は私と主人と、主人の兄の三人がそばにおりましたけれど、〝みんな私にうそついてたやないか〟いうて、コーンとほっぺ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.